

視界ゼロ時代における外国語教育

—Foreign Language Instruction in an age when the visibility is zero

水野 晴光

ダニエル・ベルの「脱工業化社会」やアルヴィン・トフラーの「第三の波」からマリリン・ファーガソンの「アクエリアン革命」にいたるまで、近頃、変革を予告する発言が続いている。そのいずれもが変化・変革の必然性を強調している。現在、われわれは変革のまっただなかの視界ゼロの時代にいるといってよい。

ところで、知識は豊富であるが応用の効かない人のことを英語で Learned fool という。視界ゼロの時代にはこのような人はサバイバルできず脱落してしまう。これまでの視界可能な時代にあっては作業は予測可能で、一定のデータに準じて作業を進めれば、期待する作業成果が得られたのであるが、視界ゼロの時代においては予測不能な出来事が次から次に派生する可能性があり、従来のような問題解決主義は通用しないからである。これからは機会開発（Developing Chances）の時代であり、ソフトな頭脳の持ち主でなければ活躍できないであろう。このような変革の時代にあって、これからの外国語教育はどのように改められるべきであろうか。

リズムとイメージの重視

国際化・情報化・ハイテク=ハイタッチの21世紀にむけて求められる外国語教育とは、一言でいえば、「リズムとイメージを重視した学習者中心の国際理解教育」といえよう。ことばのリズムを捉え、イメージを描くのは右脳の機能である。したがって、これからの外国語教育は右脳を積極的に働かせる教育ということになる。

日本は明治維新以後、西欧文明をいち早く輸入し、戦後は世界にも類例のないほどの高度経済成長を達成したが、これを可能にしたのが左脳偏重の教育であり、左脳型人間の重用であった。その結果、高度経済成長時代の中頃からすでに、日本人の創造性の欠如という問題が海外からも鋭く指摘され議論されだした。重大なのはすべてが真似

からはじまっていて、しかもこの精神はいまも減っていないということである。創造性を育むにはイメージを広げる能力を養うことが肝要であり、そのために機能するのが右脳なのである。

右脳を働かせる語学教育にあっては、まず、リズムを重視し、目標言語の音声をよく理解させる必要がある。日本語の音と著しく異なる音については構音の仕方を指導したり、発音上のいろいろな違いをルールにして指導することも必要である。また、テープやビデオなどを利用してナマの音に少しでも馴れさせる工夫や、学習者がいつでも利用できる視聴覚設備とその利用環境を整備することも重要であろう。

イメージについて述べれば、ここで扱うイメージとはわれわれの5感のすべて、つまり、視覚イメージ、聴覚イメージ、味覚イメージ、臭覚イメージ、それに触覚イメージを含む。イメージには、直接には刺激を受けなくとも、刺激を受けたときと同じような身体反応を起こさせる力がある。これがイメージが単なることばと大きく異なる点である。さる大脳生理学者の推計によれば、われわれの記憶のなかにあることばの情報量とイメージの情報量の比は1:100以上になるそうである。この違いをカナダの社会学者でコミュニケーション理論の大家であるマーシャル・マクルーハンは「ラジオで育った60才とテレビで育った6才」という言葉で表している。従って、これからの外国語の授業においては、映画やドラマ、あるいは歌やゲームなど、さまざまなメディアを用いて学習者の右脳を刺激し、クリアなイメージを描かせながら学習させるような工夫が是非とも必要になってくる。

発音については、英語の音を最も英語らしく発音するコツは何かといえば、腹式呼吸にあるとだけ述べておこう（ここでは時間の制約があり、詳しくは触れないことにする。）

よくわかる・楽しい授業

次に、学習者中心の授業とは次の2点に集約される。一つは学習者にとって「よくわかる授業」であり、もう一つは学習者が「楽しく学習できる授業」ということである。「よくわかる授業」とは教える内容が学習者に正しくイメージされる授業ということである。そのための教材として絵や実物が用いられる。ところで、教材は現実に近いほどより適切というわけでもない。シチュエーションが複雑すぎると、教えようとする学習目標から学習者の注意をそらす危険があるからである。教材には余計なものがなく明解なイメージを与えるものでなければならない。

では、どうすれば「楽しい授業」をすることができるのであろうか。教師が教室で滑稽なことを言って学習者を笑わせても、それで語学に興味をもたせることにはならない。学習者が語学に真の意味で興味を感じるのは、自分の語学力が伸びていると自覚するときであり、また、学習した語学が実際に役立っていると自覚するときでもある。すなわち、achievement にたいする満足感が最大のモチベーションになるわけである。この満足感をいかにして学習者に味わせることができるかが決定的に重要である。学習が meaningful なものでなければ、学習者のモチベーションは失われてしまう。とりわけ、文章の丸暗記、機械的なパターン・プラクティス、こと細かいエラー・チェックは学習意欲を低下させる三悪であるから極力避けたいものである。

ことばは、本来、有機的なつながりをもった社会・心理的ゲシュタルトである。したがって phonetics, syntax, semantic は互いに密接に絡み合っている。われわれがコミュニケーションをする場合、最終的に必要となるのはことばの意味であるが、意味はそのことばのもつ音のルール（すなわち、音法）や文法（グラマー）にたえず左右される。ところが現在、日本人学習者の大半は文法の知識はあっても、音法の知識にすこぶる暗い。つまり、日本人の英語の問題の80%はこの音法上の問題であって、学習者に音法をしっかりと教える

必要がある。学習者が音法を身につければ、その言語に接する機会が増えるにつれて学習へのモチベーションも高くなる筈である。

学習者の学習意欲を高めるもう一つの手段はできるだけ少数の精選された語で書かれた書物を大量に読む習慣をつけさせることである。ある言語をマスターするためには Listening, Speaking, Reading, Writing の4技能を高める必要があるが、日本人の場合、Speaking や Writing には多少のリスクが伴ううえ、訂正の機会が得難いこともあり、Listening や Reading に力を注ぐ方が効率的であると考えられる。逆に、Listening や Reading の力がしっかり身につけば、Speaking や Writing もさほど困難なものではなくなるであろう。

イギリスの心理・言語学者である C・K・Ogden は英語をなんとか国際語・補助語として活用できないかと考え、さまざまな文の構造に使える便利な単語850語を抽出し、Basic English と命名した。この850語はインテリが日常のコミュニケーションを行なう場合でも何一つ不自由なく表現できるばかりでなく、Basic English は英語の中で最も中心となる単語であることから、その文は最も英語らしい英語といわれている。このような文を大量に読む利点は英語の Structure に慣れ、英語の語順にたいする違和感がなくなることである。850語を使いこなせるようになるうちに、英語的な言葉の発想を身につけることになるだろう。

Basic English は国際語として作られたものであり、これをマスターすれば世界中どこへ行っても英語で通じる筈である。とはいえ、コミュニケーションはことばを介してのみ営まれるものではない。マレービアンによれば、コミュニケーションにおいてことばが占める割合はわずか7%にすぎず、55%は body language によるという。どのような文化にもサイン・ランゲージはあり、同じサインが同じ意味をもつとは限らない。われわれの文化と対比しながら広い文化知識を身につけることも、これからの語学教育に不可欠の要件であろう。（これは1989年12月6日に行われた「外国語研究センター共同研究推進フォーラム」第1回例会での報告を要約したものである。）